敬意と国際事情
外交政策としての相互福利・恩恵・礼

ディヴィッド・マツモト
心理学博士
米国サンフランシスコ州立大学　教授
ポール・エクマン・グループ　実行副グループ長

柔道の文化，敬意の念と互恵の精神

文化とは，人生・生活の意義や情報が，ある集団により体系的に共有化されたものであり，その集団内で代々伝承されるものである（Matsumoto & Juang, 2007）。柔道，剣道，合気道，空手，相撲といった様々な武道を理解するには，そのそれぞれの文化を理解するのも一つの手である。共通の起源を持つ多くの集団で見られるように，それぞれの武道の文化は，類似する面もあれば，かけ離れている面もある。類似面としては，規律，忍耐，勤勉，敬意の念を中心にした価値観が挙げられる。

本稿では，筆者が最も良く知る武道である柔道を手がかりとし，これらの価値観の一つの「敬意」について考察する。まず最初に，多くの武道家も一般の人達も一様に「敬意」という言葉を口にするものの，その意味するところはそれぞれ異なるという点について言及しておきたい。それは「敬意」という言葉にさまざまな黙示的な定義があることに起因している。よって「敬意」という言葉を使用する場合，その実用上の定義を明確にしておくことが重要となる。これにより，各人がいかなる意味で「敬意」という言葉を用いているかが明確になるからである。筆者は「敬意」という言葉を以下のように定義する：他の人の価値あるいは価値観を，その人やその人が所属する集団の世界観の視点で見，それを認め，受け入れていくこと。

敬意の念とは，他の人の価値をその人の観点から見て，認め，理解し，高く評価するときに，自然に伝わっていく感情である。よって，このような敬意の念は，夫婦間，友達・家族間，あるいは仕事仲間の間でも抱くことが可能である。ここでは，上下関係の厳しい柔道界において，生徒が先生に抱くいわゆる敬意の念のことについて言及しているが，実際，敬意の念は上下関係とは無関係である。上司が部下に，あるいは親が子供に敬意を払うことがあるように，先生が生徒に敬意を払うこともある。この敬意の念は，様々な武道間，あるいは武道家の間でも払われることは言うまでもない。

見知らぬ他人，対戦相手，あるいは宿敵に対してでさえ，敬意の念を抱くことはできる。競技柔道の世界では，対戦相手から敬意を受けることが最高の栄誉の一つになることがある。敬意の念は，好きとか，受け入れるとか，認めるということではない。別段好きではない人，あるいはその人の行動を受け入れても認めてもいない人に対しても，敬意の念を持つことはできると筆者は考える。

他の武道の多くと同様，柔道においても，敬意の念は実際の行動を通じてさまざまな方法で示されており，また当然示されるべきものである。厳しい上下関係をベースとする柔道文化では，行動，態度，感情を抑えて立場の違いを示すことで，敬意の念を表現することが多い。敬意の念は，柔道やすべての武道の根幹をなすものの一つなのである（しかし，柔道のスポーツ化が過剰に進んだ結果，ある程度，あるいは，大いに，この考え方が変わってきたという議論もある。この点については，改めて論じたい）。また筆者は，国や文化の違いによって，人々の敬意の念の教え方や行動での敬意の表し方が変わるという点に非常に大

きな興味を覚えている。人々が，敬意の念を教えたり，行動で示したりする場合，各人が自分自身の文化的環境や文化規範に従ってそれを行う（マツモト，2007 年）。柔道や他のほとんどの武道では，敬意の念を一般的に行動で示す一つの方法として「礼」を行う。柔道では，礼は，敬意の念を具体的に示す行為になる。1882 年の柔道創始以来，様々な点で変化してきた柔道ではあるが，礼は，柔道文化，武道文化の一部として変わることなく行われている。

柔道文化におけるもう一つの重要な考え方に，「共栄互恵の精神」がある。柔道で掲げられる概念のひとつに「自他共栄」 — 柔道をする主な目的の一つは，自他ともが共存共栄する人生が送れるように心身を鍛えることであるという考え方 — がある。この考えに基づき，自らの成功を考えるときには，必ず，他人の成功も同時に考える。つまり，ただ単に自分の行動に関連して付随的に他人も成功することを考えるだけではなく，自分の行動が基になって，他人を成功に導くという観点も必要だということである。この論法では，成功は，他人への善行によって測られることになる。このような考え方の根底には，他人に対する敬意の念が必要条件として存在していることは確かである。そうした敬意の念がなければ，共栄互恵の人生を送ることは，不可能ではないが，難しいだろう。

日本の武道界の初期には，嘉納，植芝，船越といった多くの指導者たちが，定期的にお互いを訪問し合ったり，思想や実践的な知識を交換し合ったり，門人をお互いの道場や実技に触れさせたりすることによって，お互いへの敬意の念をはっきりと表していたが，残念なことに，今日の武道界ではそうした敬意の念について，耳にする機会は少ない。今日では，それぞれの武道は，自分の殻に閉じこもってしまう傾向が強く，他の武道，また，外国の武道に対し，さまざまな形で直接的に，敬意を欠く行為を行ったり，あるいは見下した態度を取っているということをしばしば耳にするようになった。

また，礼が，依然として，本来意図したのと同じ意味合いの敬意の念を具体的に表す行為として存続しているのかについても，議論の余地がある。確かに，礼という行為あるいは礼らしき行為（たとえば，首を縦に振る行為）は行なわれるものの，敬意の念を示すその他の行動はほとんど行われていないというような場合も多い。嘉納師範は「伝統とは形を継承することを言わず，その魂を，その精神を継承することを伝統という（形や外見を代々継承するのが伝統なのではなく，心と精神を継承していくことが伝統なのである）」と言っている。筆者は，師範のこの言葉について，我々武道界に身を置く者が，時として，実質より形の伝承に重きを置くことに対する警鐘であると解釈している。礼のやり方あるいは外見的な姿ではなく，礼の本来の意味である敬意の念が正しく教えられ，体現されているのかをもう一度チェックしてみるべきであろう。さもなければ，偽善者よばわりされても甘んじて受け入れなければならなくなる。柔道界は，国際化や世界への普及によって発展を遂げ，また，主要なオリンピック競技として台頭してきたものの，敬意の念および礼の本来の意味を柔道修行者あるいは武道界全体にわたって浸透させるには，我々が今後とも継続してすべきことが山ほどあるのが実情である。

より大きな視点を持って

発表者は，25 年以上にわたって，文化，感情，非言語コミュニケーションについて研究を行ってきているが，ここ数年は，米国政府や米国の同盟国政府と共同で，異文化対応能力の育成に従事している。異文化間の関係は，国内外両方の視点から，米国政府にとっても，世界中の多くの国々にとっても，大きな関心事となっている。国内的にみれば，多くの国々が，全く違う文化を持つ国々からの移民を抱えている。自発的な移民がほとんどではあるが，なかにはそうでない移民もいる。筆者は，本稿をロンドンからサンフランシスコへの帰途の機中で執筆しているが，両都市とも非常に多様性に富んでいる。とはいえ，これ

ら二都市が例外という訳ではない。大量の移民者が，多くの国々に大きな文化的な多様性をもたらしたが，同時に，複雑な社会問題も数多く発生し，国内政策，国際関係，経済に影響を与えている。

また，大きな関心事である諸国間の国際関係においても，文化に根差した数多くの違いが見られる。民主主義は，多くの国々で気軽に口にされ，広く受け入れられている考え方ではあるが，この中にも様々な形があり，国によってその運用形態は異なる。また，個人主義，独立性および資本主義政治経済体制に基づく文化的な価値と，保守主義，社会主義および共産主義に基づく文化的価値とは相容れず，またキリスト教，イスラム教，仏教等の異なる宗教にもそれぞれ個別の教義があり，抜本的に全く正反対で互いに対立しあっている。こうした相違が，過去数世紀の数々の宗教戦争の原因となっている。

それぞれの集団が，世界中の全く異なる地域で生活し，全く異なる気候や利用可能な資源の条件下で自然の脅威と戦いながら生存してきたことから，こうした相違は避けられない。集団それぞれが，複雑な社会問題を対処するために全く異なる文化を形成し，維持してきた（バン・デ・ブリアート，近刊）。こうした文化が，人類存続の一助になってきたことに疑いの余地はなく，文化は，人類の存続に極めて有益であった。さらに，文化は，人間にとっての空気，あるいは，魚にとっての水のように，その存在が目に見えない。したがって，文化は，人類の存続に有益であるものの，その有益性が明確に認知されることはないのである。

こうした文化的な相違は，それぞれの集団が互いに孤立して存在している間（実際に最近までは，おおよそ，そういう状態だった）は，問題にならなかったが，文化の交流が進むにつれ，異文化間の争いは不可避となった。このような争いは，有史以来の人類の歴史上，人口移動や領土侵略を伴いながら，何度となく繰り返されているものである。今日では，通信技術，輸送技術の発達に伴って，世界が以前に比べてはるかに小さくなった。その結果，以前にもまして，全く異なる文化的背景を持った人々が，より速く，より完全な形で交流しており，争いが発生する潜在的なリスクは拡大している。昨日までの世界が，文化的集団が相対的にお互い独立して存在していたことに特徴づけられるのに対し，今日の世界は，人類史上類まれな諸国間，諸文化間での根本的な相互依存関係がその特徴となっているのである。

しかしながら，ほとんどの国の外交政策（もちろんそれらの国の一般国民の考え方も同じである）は，孤立主義と非依存性を根本的な前提に置いた昨日までの世界観に基づいて形成されている。今日の新しい世界で，そうした旧来の前提のまま外交政策が構築されれば，諸国間の緊張は必然的に増し，争いが発生する潜在的なリスクが高まる。現在，我々は，まさにこうした状況に直面していると筆者は考える。中東，ヨーロッパ南東部，西部ロシア，アフリカ最東北端のソマリア，東南アジアなど，今日私たちが直面している問題は，世界における自らの立場に関する根深い誤解と，相手の立場についての誤った解釈に根差しているものが多い。そうした誤解や間違った解釈が生まれる根本的な原因は，文化上の相違に加え，相手に対する正しい理解と基本的な敬意の念が欠落していることなのである。

これとは対照的に，今後の外交政策は，諸国間，諸文化間での根本的な相互依存の原則に基づいて形成されることになると筆者は考える。そうした相互依存は，すでに今日では現実化しており，将来的にもそうあり続けるだろう。例えば，米国で販売される製品の場合，設計は米国，製造は中国，台湾あるいはメキシコで行われ，世界の販売網を通じて販売業者が卸し，最終的に地元の小売店で小売されるといったケースも珍しくない。例えば，スーパーマーケットの「セーフウェイ」でバナナ一本買えば，南米の農夫，中米および北米のトラック業者，米国の小売店に仕事を与えることになる。現在，日本では，まだ米国ほど相互依存は進んでいないものの，相互依存の傾向は，ますます高まっており，今後はさらにその傾向が強まるに違いない。

外交政策が，諸国間，諸文化間での根本的な相互依存の原則に基づいて形成されれば，現在の外交政策―利己主義と独善性しか醸成しない孤立主義と非依存主義に基づいたもの―　と，全く正反対ではないにせよ，大きく異なる慣行や手法を創造していく可能性がある。根本的な相互依存に基づく外交政策において，ある文化の生活様式（ライフスタイル）を守り，存続させていくことは，他の文化を守り，存続させることと根本的に直結していると筆者は考える。この概念においては，文化的な成功は，共栄互恵の原則によって決定され，また，共栄互恵の原則により，ある文化の成功は，相手の文化の隆盛によって決まることになる。この原則の根幹には，相互に敬意の念を持つという精神に基づいた必須の要素がある。個人レベルと同様，国家間の信頼，協力，共栄互恵も，相互に敬意の念を持たなければ，生まれてくることはないのである。

こうした課題は，武道の修行のまさに核心に当たる部分である。よって，その意味において，武道は，世界の舞台で，こうした課題の重要性を正しく認識していく運動を主導する役割を果たすことができると筆者は考える。こうしたテーマ　―信頼，協力，共栄互恵，敬意の念―　は，武道の特徴と価値を定義するものであり，武道を行う上での究極の目的を想起させるものである。柔道自体も，古来の武術である柔術から，敬意と共栄互恵の精神に基づく近代的な自己修養を尊ぶ武術として発展し，社会および文化における社会問題に対処する手段へと変化してきた。今こそもう一度，我々，そして，子供たちあるいは孫たちが将来に直面するこの複雑かつ極めて重要な社会的・文化的な問題に取り組めるよう，今度は世界を舞台として，柔道をはじめとするすべての武道がさらなる進化を遂げるべきなのである。

では，具体的にはどのような取り組みを行うべきか？　この問題を打開策一つで解決するのが難しいのは誰の目にも明らかである。この問題の解決には複数の解決策を必要とする。それには，武道の普及を進め，研究を実施し，これらの原則を社会，社会システム，社会的，文化的リーダーに教育し，それに適応させていく必要がある。ビジョンと影響力を共に具える組織と個人が，国や文化や宗教より重要で，国家の個々の利害を超越する公共の利益のために団結しなければならない。そうすることにより，敬意と共栄互恵の原則が，社会政策や外交政策の基盤を形成し，何世代にわたっても持続する社会的および文化的な資本を生み出す場ができる。武道修行者は，性別，背景，身体の大きさあるいは体力に拘わらず，試合や稽古の前後に相手に敬意を表して，深く礼を行う。同様に，各国が，人口，地理，軍事力あるいはGDP（国内総生産）の大きさに関係なく，相互依存の関係する利害問題を協議するに先立ち，お互いに深く礼をし合う世界を想像してみてほしい。そうした世界は我々のすぐ手の届くところにある。武道は，そうした世界の実現に一役買うべきなのである。

参考文献

Matsumoto, D. (2007). Individual and cultural differences in status differentiation: The Status Differentiation Scale. Journal of Cross-Cultural Psychology, 38(4), 413-431.

Matsumoto, D., & Juang, L. (2007). Culture and Psychology (4th ed.). Belmont, CA: Wadsworth.

Van de Vliert, E. (in press). Climate and cash rock the cradle of culture. New York: Cambridge University Press.